

# 株式会社乾レンズ

社長 乾喜則さん

日常使いのできる透明な  
「サングラス」で勝負！



最近紫外線やブルーライトへの  
関心が高まってきましたよね。  
サングラスがもっと身近なものに  
なったらいいなと思ってます。

主力製品である「オールタイムサングラス」とは、透明もしくはライトカラーのレンズでありながら、有害な紫外線を99%以上カットし、さらにパソコンや携帯などからのブルーライトも独自のコーティング技術でカットする、まさに朝から夜まで目を守ることのできるサングラスのことだ。このレンズを開発したのは、昭和28年創業の乾レンズ。父から会社を引き継いだ現社長の乾喜則(いぬいよしのり)社長は、クオリティの高いレンズの開発に力を注いできた。

生野区にある本社でレンズを製造したのち、福井県鯖江市に出荷し加工する。鯖江の多くのメガネメーカーと取り引きしつつ、欧米や香港での展示会にも精力的に参加し、レンズの85%は海外へ輸出している。技術力の高さから、海外のデザイナーからのオファーも絶えない。



オールタイムサングラス ▲

2020年 5月号

# 丸福製紐株式会社

社長 作田庄治さん。



ゴム製品一筋！  
オーダーの実現力と、品質の良さで勝負！

ヘアゴムやズボンのウエストゴムだけでなく、服飾品や生活用品で幅広く使われているゴム紐・ゴムテープ。製造を海外に移す企業も多い中、昭和9年の創業以来、丸福製紐株式会社は区内の自社工場で、高品質なゴム製品を作り続けている。



▲ 自社ブランド「ホシ☆クジャク印」のゴムは、手芸屋さんなどで手に入る。

▲ 15歳で入社し、60年以上ゴム製品に携わるスペシャリスト！現在、関西でゴム製品を製造しているのは同社だけなのだそう。

製紐機にセットされたボビンから糸を引き寄せ、複雑に回転させながらゴムに巻き付けることでゴム紐ができあがる。ゴムの太さや糸の素材、巻きつけ方を変えることで、強度や伸縮性の違う様々なバリエーションが実現可能なのだそう。

企業からのざっくりとしたイメージを、確実に形にして希望に込められるのは、職人として長年培ってきた経験があるからこそ。確かな“ものづくり”の技術で、今日も製紐機と向き合う。

▲ メッキ前の状態。  
同じ形状のものなら重ねることができる。

2020年 6月号

# 株式会社木村工務店

社長 木村貴一さん



建築デザインで“快適な空間”を創造する

工務店という名ではあるが、設計から施工まで一貫して携わる。住宅をはじめ、店舗、工場、事務所など、そのフィールドは幅広い。「木村工務店」の手掛ける建築は、洗練されたデザインと、ふんだんに使用される無垢の木が特徴的だ。木の感触を味わいながら、その空間に身をずっと置いていたくなる。



▲ 貴一さんと同じく建築士である息子の貴徳さん(右)は、6月号「いくのdeリノベ」で紹介した「リゲッタ生野本店」を担当チームで創りあげていく。

▲ チームで完成にこぎつく

「お客さんには、設計部の一員になってもらうイメージで打ち合せを重ねるんです。」と木村社長。施工主(せこうぬし)との対話を重ねながら、30~40もの協力会社とともに、チームで創りあげていく。

社長の木村貴一さんは「人間が日々暮らしていくうえで機能的で居心地の良い、そんな建築空間をつくることに軸を置いている」と話す。時に扱いが難しい自然素材。しかし「木造住宅を伝承していきたい」と木へのこだわりはゆるがない。



▲ リゲッタ生野本店



# 株式会社 ノダ

社長 野田隆昌さん



国内顧客数No.1！

「木型・抜き型」業界で世界一を目指す！

社長とは矛盾を解決する仕事。  
解決策は必ず見つかります。

株式会社ノダが製造しているのは、商品の型を切り抜くための“木と金属の刃を組み合わせた道具”だ。この「木型・抜き型」で作られる商品には、不織布製のフェイスパックやマスク、プラスチック製のシャンプーの詰め替えパック、布製のエアバッグ、金属製の携帯電話の部品などがある。同社は多種多様な素材への対応の実現により、様々な業界の要望に答えてきた。現在、木型・抜き型業界での顧客数はNo.1なのだそう。

「どうせやるなら世界一」と、業界内では初の海外進出を決めた。生野の地で始めたこの事業は、いまや国内5拠点、海外3拠点で事業を展開するまでとなった。

リモートでの会議や営業をいち早く導入するなど、ITを活用した業務の効率化にも積極的だ。今後も、時代を見据え、新しい可能性を追求していく。

型は、四角い木板に  
刃物を組み合わせて  
作られる。



▲ フェイスマスク



▲ マスク

木型は全て金属で作る金型と比べ、  
「小ロット」「短納期」「低コスト」  
「柔軟な設計変更」が可能！

2020年11月号

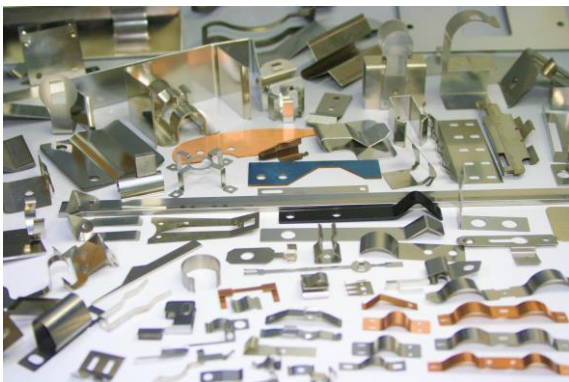
# 有限会社 こだま製作所

社長 笹尾恭三さん



「薄板加工」と「溶接」の奥深い世界  
たった5人の町工場の技術が評判を呼ぶ！

こだま製作所は薄い金属の加工や溶接加工を行なっている従業員わずか5人の小さな会社だ。ここで作られているのは、製造ラインで使う機械の部品や、半導体の一部などで、単体で見ても用途が想像できないものばかりだ。溶接する金属によって温度や時間が違うため、新しい金属ができる度に、その特性を見極めて加工しなければならない。



▲ 金属製品を作ろうと思うと、必ずといっていいほど必要な「溶接」の工程。その形は実に様々だ。時には0.04ミリの小さな部品を扱うことも。

挑戦の積み重ねで今がある。  
新しいお客さんとの出会いが  
会社を育ててくれたんです。  
今後は、IoTや宇宙分野にも  
関わってみたいですね！

技術力の高さが評判を呼び、新製品の開発などで製作がうまく進まず、困りに困ったメーカーから「なんとかやってもらえないか」と依頼がくることも。

初めて扱う金属の加工でも"どうやったらできるか"といろいろ模索するのだそう。「新しい挑戦はいつもワクワクするんです。気持ちよくいい仕事をしていくためにも、日々技術を高めたい。」と笹尾社長は楽しそうに話してくれた。

2020年 | 2月号